10　O・テムキンの『てんかんの歴史』にみる時代区分について

小曽戸　明　子

Owsei Temkin（1902―　）『The Falling sickness』の副題は、「A History of Epilepsy from the Greeks to the Beginnings of Modern Neurology」であり、その第二版が和田豊治により訳され出版されている。それには第一版の序（日付はない）、第二版の序（一九七〇年六月）と共に「日本語版の読者へ」と題された、一九八七年五月の日付のある一文が冒頭に置かれている。

「本書が日本語に翻訳されるのは私には大きな名誉であり、その労をとられた和田教授に感謝する」ではじまるこの一文はつづけて「てんかん――というよりわれわれは複数呼称のてんかんというべきであるが――は世界中にみられる国境を越えた病気である。一方現代の医学は国際的につながっているので、ほとんどの国でてんかんの類型診断は同じ線上にあって、同一あるいは類似の治療がおこなわれている。しかしてんかんはまた、きわめて古い病気であり」「本書を The Falling Sickness と名づけたが、この古い古称はてんかんと、それから分離されなかった他の病気や症候群とにとりかこまれている」「私は西洋におけるてんかんの歴史を展望してきた。しかし日本のような国に、てんかんが豊かな歴史をもっているように思われてならない。日本の皆さまが、私の西洋という一面的な接近を許容されるとともに、この本になにか普遍的な人間としての、そしてまた医学的な興味を見出されることを希うものである」で結ばれている。一一二〇にものぼる文献にあたって記されたこの書が、なお一面的接近であると記すテムキンの東洋へのまなざしに注目したい。

第一版（一九四五年）の序で、「てんかんの歴史は熟していない。その研究はおそらく成算も疑わしい仕事であろう」となげくように記し、「てんかんの歴史の場合には、たとえば結核のそれのような方法では書けない」とするテムキンが、シェークスピアの「ジュリアス・シー

ザー」の読者がよく知っている通俗的な名称「たおれ病い」（The Falling Sickness）を書に題にふさわしいとして用いた理由も記されている。最終章（十三章）は、「たおれ病いの終焉」と訳されているが、原書では The End of the Falling Sickness? とあり、テムキンの思いはこの疑問符に込められているように思われる。

原始医学を除き、てんかんに関する西洋で最も古い記録を残した古代ギリシャ人たちから始めるテムキンの用いた時代区分は、以下の六つである。

一、古代　ANTIQUITY
二、中世　THE MIDDLE AGES
三、ルネサンス　THE RENAISSANCE
四、大体系と啓蒙期　THE GREAT SYSTEMS AND THE PERIOD OF ENLIGHTENMENT
五、十九世紀〈一八〇〇～一八六一年〉
六、十九世紀　ジャクソンの時代　THE AGE OF HUGHLINGS JACKSON

二十五年を経て改訂新版を出すことを選択したテムキンは、年代的には十九世紀の八〇年代までとしたが、歴史的な客観性をもって測れるほどに十分な視点を未だ持ち得ていない、として、本書はあくまでも西洋文化 western civilization におけるてんかんの歴史であり、the beginnings of modern neurology を越えてはいないと明言している。

一八八〇年以降にはあえてふれない姿勢が感じられるのは、ジャクソンとシャルコーのしごとに今日的論争のはじまりを見、歴史的視点の終り（達成？）を得ているからのように思える。

（海上寮療養所）